

《作品紹介》

個人蔵木造南無仏太子立像

石 井 千 紘

はじめに

『聖徳太子伝暦』にいう「合掌向東、称南無仏、而再拝、不因人教」^(註1)を典拠とした聖徳太子像は、「南無仏太子像」あるいは「太子二歳像」と通称される。南無仏太子像は、一般に、頭部を円頂とし、上半身を裸形、下半身に長袴のみを着け、合掌して立つ幼児の姿にあらわされる。また、『聖徳太子伝私記』などに、「南無仏」と唱えた太子の掌中から仏舎利が出現したとする伝説があることから、南無仏太子と仏舎利とが密接に結びつくことが指摘されており^(註2)、南無仏太子像の多くが、合掌した両手をわずかにふくらませ、あたかも仏舎利を内包しているかのように表現される。

南無仏太子像の彫刻作例は、鎌倉時代前期にさかのぼる基準作は知られず、鎌倉時代末期から南北朝時代までの一時期に遺品が集中している。このほど鎌倉国宝館の寄託になった個人蔵の南無仏太子立像(図1～8)^(註3)は、その優れた造形から、鎌倉時代末期、14世紀前半頃の造立と推定されるものであり、現存する南無仏太子像のなかでも比較的早期の遺品とみなされる。そこで本稿では、像の基本情報を提示し、製作年代についての検討を試みるとともに、南無仏太子像の像高にかんする若干の私見を述べることにしたい。

1. 基本情報

〔形状〕

頭部を円頂とし、髪際線をあらわさない。鼻孔と耳孔を穿ち、わずかに窪みをつくるが、いずれも貫通しない。首に二条の二道相をあらわす。上半身を裸形とし、臍を下向きの浅い窪みであらわす。下半身に長袴を穿く。袴の裾は地付きから後方に長く引く。両手は体部正面で合掌し、指先を前方にやや傾ける。長袴の裾を踏まえて直立する。

〔法量〕 ※単位は cm

像高 31.1(1尺4分)

頂頸 7.1 面幅 4.8 耳張 5.7 面奥 5.9

胸奥(左) 5.3 同(右) 5.4 肘張 9.8 腋下幅 6.3

裾張(前) 11.8 同(後) 13.5 足先開(外) 8.8 同(内) 2.5

図 1 南無仏太子立像 全身正面

図 2 同 全身左斜側面

図 3 同 全身右側面

図 4 同 全身背面

図 5 同 頭部右斜側面

図 6 同 頭部正面

図 7 同 頭部右側面

図 8 同 頭部左側面

〔品質・構造〕

ヒノキとみられる針葉樹材の寄木造りで、頭体幹部は両耳後ろを通る線で前後二材を矧ぎ、内削りのうえ、首の陰刻線下で割首し、玉眼を嵌入する。両手は肩・肘・前膊半ばで各別材を矧ぐ。なお、肘の材と前膊半ばの材の間にはマチ材を入れる。合掌手は共木とし、両手首で矧ぐかと思われる。体幹部材の後方、長袴の裾部に前後二材を矧ぐ。体幹部後方材の下方左側面に別材を矧ぐ。

図9 同 像底

像底の体幹部後方材前面中央に長方形の柄穴(縦0.7cm、横1.6cm、深さ3.8cm)がある(図9)。

像表面は錆漆下地黒漆塗りとし、全面を白色で塗ったうえで彩色を施す。肉身部は、現状では黄色みをおびた白色を呈する。眉を墨線で描き、唇を朱色に塗る。玉眼は瞳を黒であらわし、目頭・目尻を青くぼかす。長袴に朱彩を施す。また、体幹部材の像底の一部に布張りが認められる。

〔保存状態〕

両手首は後補、袴裾後方部の二材も後補とみられる。体幹部後方材および袴裾後方材の地付き部両側面に部分的な欠失が認められる。像表面は全体に彩色の剥落が著しい。なお、腰部右側の袴の帯の部分に小穴があり、本来は、ここに別材製の腰紐の結び目を取り付けていたものと考えられる^(註4)。また、両肩の側面や、体幹部材の像底などに鉄釘が用いられているが、これは後世の修理時のものと思われる。

2. 作風と製作年代

次に本像の作風上の特色を確認し、製作年代の推定を試みてみたい。

本像は、体部にたいして、頭部がやや大きくつくられた、いわゆる幼児体型を示している。南無仏太子像は聖徳太子二歳の姿をあらわしたものであり、同様の体型は、鎌倉時代末期から南北朝時代にかけてつくられた他の作例にも認められるものである。肩はややなで肩であり、肩幅も狭くつくられているが、腰以下を大きく張り出すことで、胴囲が絞られ、プロポーションにメリハリがつけられている。側面の奥行きは頭・体部ともに過不足なく表現され、バランスよく仕上げられている。また、正面では下方に向かって袴を末広がりに作ることで、全体として非常に安定感のある姿となっている。面貌は、目鼻を顔の中央に集中させ、眉間に皺を寄せたやや陰しい表情を示している。着衣の表現では、袴の折り目の稜線が鎬だつように、深く丹念に彫り込まれている。

ところで、『吾妻鏡』承元4年(1210)11月22日条には「於御持仏堂。被供養聖徳太子御影^{南無仏}。眞智房法橋隆宣爲導師。此事日來御願^{云々}」^(註5)とあり、三代将軍源実朝が持仏

堂で南無仏太子像を供養したことを記している。一般に、彫刻作品としての南無仏太子像はこれが初出とみなされている。また、『太子伝玉林抄』（文安5年〈1448〉成立）は、南無仏太子像の起源について、建長～弘長（1249～63）頃、橘寺の敬願房が3歳の持明院王子をモデルとして仏師丹好に造らせた像が最初であると記している^{（註6）}。ただし現時点では、両者の時期まで遡る在銘の彫刻作品は知られていない。

現存する南無仏太子像のうち、年紀を有するものでは正応5年（1292）銘のアメリカ・セジューックコレクション像が最も古く、正安4年（1302）銘の奈良・大久保町観音堂像がこれに続く^{（註7）}。津田徹英氏は、13世紀末から14世紀初め頃までの南無仏太子像について、腰以下の量感を抑え、袴の下方は滑らかに両脚にまとわりつくような表現に特色が認められることを指摘されている^{（註8）}。そうした像は全体として、合掌手を作ることによって肩が上がり、意識的に細身につくった下半身との間に落差が生じるため、ややアンバランスな印象を受ける。一方、本像の場合、腰部が大きく張り出し、袴の裾は地付きに至るほど左右に開く傾向にある分、非常に安定感のある立ち姿となっている。また、袴の折り目も鎬が立ち、袴を踏まえて立つ両脚の間もはっきりと分かたれている。本像のように袴を裾広がりとする表現は、延慶2年（1309）銘の円成寺像や、いずれも13世紀末から14世紀初め頃までの製作とされる大阪・四天王寺像、愛知・満性寺像などと類似している。また、本像の眉を顰めた険しい表情や両腋以下の上半身を細身に作る点は四天王寺に共通する。

ちなみに、元応2年（1320）銘のMOA美術館像では、袴は臀部でやや張り出したのち、下方に向けて裾が窄まり、衣の中の両脚の形が比較的明瞭に捉えられるようになる。また、建武5年（1338）銘の広島・浄土寺像は、袴を裾広がりとし、折り目の稜線を明快にあらわす点は本像と共通するが、稜線はやや単調で伸びやかさを欠いており、肉身の張りや袴のふくらみも控えめに表現されている。本像の緊張感のある佇まいは、浄土寺像などの南北朝時代の作例にはみられないものである。このことは、本像の製作年代が、南北朝時代以前にさかのぼることを示しているといえよう。

以上の検討をふまえると、本像の製作年代は、南北朝時代以前にさかのぼる鎌倉時代末期、元応2年銘のMOA美術館像に先立つ、14世紀初め頃と考えるのが妥当といえるだろう^{（註9）}。

結びにかえて

以上、鎌倉国宝館に寄託された個人蔵の南無仏太子像について、基本情報を提示し、その製作年代が鎌倉時代末期の14世紀初め頃にさかのぼる可能性を指摘した。南無仏太子像は作例の多さに比して意外と個別の論考が少ない。本稿が今後の研究の参考となれば幸いである。

最後に、本像の像高について言及して稿を閉じたい。年紀の有無に関わらず、鎌倉時代の作と推定される南無仏太子像の多くは像高60cm代であり、大きいものでは80cmを超え

る像もある。ところが、本像の場合はそれらの半分ほどであり、同時期の南無仏太子像に比べて極端に小さい。

南無仏太子の像容は「聖徳太子絵伝」などを典拠として、緋袴を穿く現行の姿へと形作られたものと考えられる。このとき上半身を裸形とするのは、太子二歳春の説話を釈迦誕生の獅子吼の説話になぞらえたためだろう^(註10)。仏伝の釈迦誕生の説話に基づいて造られた誕生仏像の多くは10～20cmほどの金銅仏で、著名な東大寺の誕生釈迦仏立像及び灌仏盤(8世紀)でも像高は47.5cmである^(註11)。基本的には仏誕会に使用するための素材・大きさであり、必ずしも実際の人間の大きさに造るものではなかった。それどころか、実際よりかなり小さめに造り、デフォルメされる傾向にある。これにたいして、南無仏太子像はあくまで人間・聖徳太子がモデルであり、その大きさは2尺以上3尺未満、現実の2歳児より一回り小さい程度で、現実から大きく離れないように造るのが通例のようだ。仏師たちの意識に「生身」というキーワードがあり、実在感のある仏像の製作に意欲的だった鎌倉時代に創出された^(註12)、比較的新しい像容ならではの仕様だと思われる。本像はその小ささから、念持仏のように携帯する用途があったのかもしれないが、あるいはこのことが製作年代の下降を示す要素となる可能性も否めない。ひとまず、検討材料として付記するに留めておきたい。

【註】

1. 国文学研究資料館編『聖徳太子伝集』(臨川書店、2006年)を参照。
2. 南無仏太子と仏舎利との結びつきについては、津田徹英「研究資料 奈良国立博物館蔵 木造南無仏太子立像」(『美術研究』401、2010年)を参照。
3. 2017年1月寄託。本像が現所蔵者のもとにいたるまでの経緯は詳らかではないが、石田茂作『聖徳太子尊像聚成』(講談社、1976年)には、大阪の実業家・細見亮市氏(1901～78)の所蔵品として紹介されている。なお、図1～9は鎌倉国宝館より提供を受けた。
4. 奈良・円成寺像(延慶2年〈1309〉)や大阪・四天王寺像(13世紀末～14世紀)などは、腰部右側に別材製の腰紐の結び目を取り付け、腰紐の末端が下方に長く垂下しており、本像も同様の仕様であった可能性が考えられる。
5. 黒板勝美編『新訂増補 国史大系』第32巻「吾妻鏡 前編」(吉川弘文館、2000年)参照。
6. 法隆寺編『法隆寺蔵尊英本太子伝玉林抄』上巻(吉川弘文館、1978年)参照。なお、該当部には、この時の南無仏太子像は多武峰攻めの時失われたとの割註を付す。また、橘寺像の造立が建長～弘長頃である根拠について、石田氏は、本記に登場する唐招提寺覚盛の弟子・戒学上人及び戒学の弟子・戒日が関係することによるという(前掲註3 石田氏著書参照)。
7. 中世の年紀を有する南無仏太子像を以下にあげる。なお、各像の像高は、大阪市立美術館『四天王寺開創1400年記念出版 聖徳太子信仰の美術』(東方出版、1996年)及び前掲註3 石田氏著書による。
 - ・正応5年(1292) セジュイックコレクション像(像高67.6cm)
 - ・正安4年(1302) 奈良・大久保町観音堂像(像高76.7cm)
 - ・嘉元2年(1304) 奈良・伝香寺像(像高70.5cm)
 - ・徳治2年(1307) 奈良・法隆寺像(像高69.2cm)
 - ・延慶2年(1309) 奈良・円成寺像(像高83.6cm)
 - ・元応2年(1320) MOA美術館像(像高68.0cm)

- ・元亨元年(1321) 滋賀・国分聖徳太子会像(像高 54.5cm)
 - ・正応2年～元亨3年(1289～1323) 京都・宝菩提院像(像高 70.9cm)
 - ・建武5年(1338) 広島・浄土寺像(像高 68.3cm)
 - ・永享8年(1436) 奈良・松尾寺像(像高 21.3cm)
 - ・天文16年(1547) 神奈川・光明寺像(像高 16.5cm)
8. 前掲註2 津田氏論考参照。
9. ちなみに、石田氏は前掲註3 同書のなかで、本像について、「剥落甚だしいため直観はよくないが、裳襪の彫法などに優れており、室町時代初期のもの」(55 頁)と言及している。
10. 太子二歳像が釈迦の誕生説話に着想を得たものとする考えは、田中重久「聖徳太子御二歳像の研究」(『聖徳太子絵伝と尊像の研究』山本湖舟写真工芸社、1943 年)や西川杏太郎「南無仏太子立像」(『大和古寺大観』第3 卷「元興寺極楽坊 元興寺 大安寺 般若寺 十輪院」、岩波書店、1977 年)などに示されている。ここで資料的根拠は明示されないが、両説話間に連動性があった可能性は考えられてよいと思われる。
11. 例外として、三重県四日市市の観音寺には木造の誕生釈迦仏立像(鎌倉時代・像高 34.2cm)が伝わる。また、金銅仏では京都・大報恩寺像(鎌倉時代)が 63.4cm と大きい。
12. 鎌倉時代の仏像と「生身」とのかかわりについては、奥健夫「生身仏像論」(『講座日本美術史』4、東京大学出版会、2005 年)を主に参照。

(付記)

金曜4限の講義終わり、意を決して浅井和春先生に声をかけた日のことは今でも覚えている。2011 年秋のことである。英米文学科の学生だった私が、大学院に入り先生のご指導を受けたいというのだから、さぞ驚かれたことだろう。それでも、快くゼミ生として受け入れてくださり、仏教美術史研究のいろはもわからぬ出来の悪い私を辛抱強く導いてくださった。自分の人生のうちに誰かを師として生きる時間があるうとは全く想像していなかったが、それが浅井先生であったことは、私にとって幸運だった。いま、こうして未熟ながら学芸員という仕事の一端に携わることができているのも、あの日、浅井先生が私を受け入れてくださったからである。ここに記して心より感謝申し上げます。

(2013 年度本学大学院博士前期課程修了／鎌倉国宝館学芸嘱託員)